

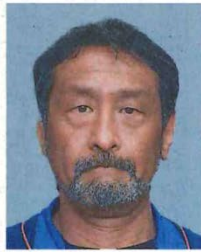
# 寄生虫の発育 解明へ前進

## 弘大など 試験管内で「成長」再現

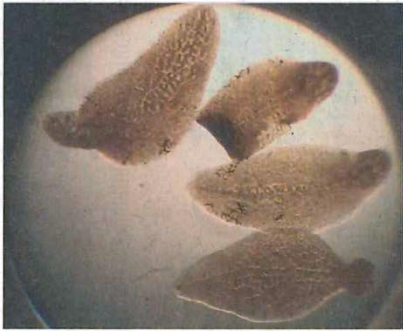
### 感染症対策、新薬開発に期待

弘前大学などの研究グループは、寄生虫「肝蛭」の成長の一部を試験管内で再現することに成功し、成長を促す物質(有性化因子)の効果を確認したと発表した。寄生虫がどう育つのかを解き明かす研究を前進させる成果で、将来は感染症対策や新しい薬の開発につながる可能性がある。(菊谷賢)

研究は弘前大、岩手大、慶応大の共同研究。肝蛭は



小林 一也教授



培養液に有性化因子を添加することで肥大成長した肝蛭の幼生(体長約3ミ) 研究グループ提供

牛などの肝臓に寄生し、畜産業に被害を与えるほか、人にも感染することがある寄生虫で、世界保健機関(WHO)が、研究や治療薬開発が十分進んでこなかった「顧みられない熱帯病」の一つに位置付けている。寄生虫は宿主の体の中で育つため、成長の仕組みを調べるのは難しく、研究の課題となってきた。研究グループは、高い再生能力で知られる扁形動物「プラナリア」で見つかっていた有性化因子に着目し、肝蛭の幼虫を育てる培養系に有性化因子を加えたところ、体が大きくなり、生殖器が発達するなど、成長が進むことを確認した。こうした変

化を実験室で再現できたことは大きな前進という。この成果によって、寄生虫がどう育つかを実験室で詳しく調べやすくなり、将来は寄生虫の成長を止めたり弱らせたりする新しい薬の開発につながる可能性もあるという。

弘前大農学生命科学部の小林一也教授は「寄生虫の発育の仕組み解明だけでなく、将来の感染症制御や創薬研究にもつながる基盤になる。今後は有性化因子の構造解明も進めたい」と語った。研究成果は3月16日、オンラインジャーナル「PLoS Neglected Tropical Diseases」(プロス・ネグレクトッド・トロピカル・ディジーズ)に掲載された。

この画像は、当該ページに限って”東奥日報社”が利用を許諾したものです。無断転載はできません。